

平成16年10月5日



## 従容録に学ぶ (三五)

### 第六則 馬祖白黒

(示衆)

衆に示して云く、口を開くことを得ざる時、無舌の人、解く語る。脚を抬起げられざる処、無足の人、解く行む。若也も他の轂中に落ち、句下に死在るれば、豈に自由の分あらんや。四山の相い逼る時、如何んが透脱さん。

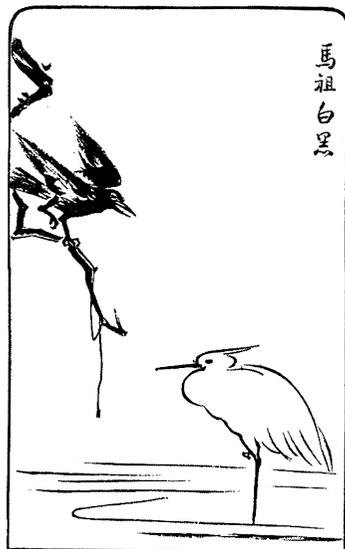
(本則)

挙す、僧、馬大師に問う。四句を離れ百非を超えて、請う師、其甲に西来意を直指さんことを(若しこの僧の問頭を知らば、人は多少の心力が省けん)。大師云く、我れ今日勞倦り、汝が為に説すこと能わず(已に舡の中に月あり)。智蔵に門取に去け(更に帆上の風を添えり)。僧、蔵に問う、(却つて人の処分を受く)。蔵云く、何ぞ和尚に問わざる(好本多同)。僧云く、和尚が来させて問わしむ(可憐靈利)。蔵云く、我れ今日頭痛にて汝が為に説すこと能わず。海兄に問取に去け(我れ馬祖の弟子と作り得ざるべからず)。僧、海に問う(苦瓠は根連も苦し)。海云く、我れ這裏に到つて却つて不会(甜瓜は蒂徹も甜し)。僧、大師に拳似す

(草鞋錢を索取え)。大師云く、蔵の頭は白、海の頭は黒(更に参ぜよ三〇年)。

今回は馬祖大師と、その門下の二大士といわれた西堂智蔵・百丈懷海という禅匠たちによる三者三様の禅機を眼目とする一則です。馬祖道一(七〇七〜七八六)といえば唐代きつての巨匠として知られ、禅が広く日常性を發揮するようになったのはこの人からといわれるほど、重要な地位を占めています。ただ、意外にも『従容録』ではこの第六則のほかには、第三六則「馬祖不安」でとりあげられているだけで、ちょっと淋しい気もします。

馬祖は四川省の出身ですが、湖南省に出て名山の南岳で懷讓和尚に参じ、その法を嗣ぎました。南岳の伝法院で終日坐禅し、懷讓との間に交わされた磨礪の問答は、あまりにも有名ですね。今則是後に馬祖が洪州開元寺で道誉を掲げていた時のエピソード。開元寺は唐の開元年間(713〜742)に全国の州に一つずつ建てられた国立寺院ですが、洪州開元寺は現在の江西省南昌市の佑民寺です。私たちがつい一ヶ月前に訪れたこの寺は、文革で見える影もなく破壊されていたとは



馬祖白黒

思えぬほど見事に修復された大寺となっていました。一二〇〇年以上も昔、馬祖がここで並はずれに新鮮な仏法を説き明かし、その名は天下に聞こえて訪れた門人は八百余人に達したとか。西堂と百丈はその中の傑物でした。後に西堂の禪は新羅で花開き、百丈は「一日不作、一日不食」の古清規で知られ、臨済という巨匠を生むのはご承知のとおりです。

さて万松さんの「示衆」は、じつに歯切れがいいですね。意識的な訓読ではおわかりでしょうか、よりくだいてみましょう。

「文字言語にふりまわされん者は、黙っていてもよく語りぬいておるし、立居振舞にムダのない者は、歩かんでもよく歩いているワイ。だから他人のワナに落ちて自由を欠き、人の言葉にしばられて自在を失ったら、どうして本来の働きができるか。生老病死の無常にワーツと襲われたら、一体どうするんだ。」

つぎに「本則」は、門下の雲水が馬祖に禪の真髓をズバリ教示を乞うた。すると馬祖は、今日はくたびれているから西堂に聞けと



僧も参拝者も多い佑民寺

つっぱねた。西堂のところへ行く

と、彼も頭痛を理由にことわり、百丈に聞けという。そこで百丈に聞くと、わからんという答え。このテンマツを雲水が馬祖に告げた、馬祖は西堂の頭は白く百丈の頭は黒いといった、というお話。

皆そろいもそろって不親切だ、と早合点しないでください。まず、雲水の問いにある「四句」や「百非」とは、インド仏教でなされた論議の形式で、ヤレ否定だの肯定だのという言語上の論理です。雲水はそんな理窟ではない「西来意」、つまりマツサラな禪の真髓を聞いた。それに対して三者はみ

な教えてくれない。なぜなのか。これがまず眼目。

それは、禪の真髓はありていの言葉では示せないからです。奥深いところは何でも冷暖自知。生活体験の中でみずから体得し発見すべきものだからです。だから馬祖が話さなかったのを、万松は「すでに缸中に月あり」と、答えはおのれ自身の月という仏心を会得することだよ、と適確なコメント。同様に西堂と百丈についてのニガウリとアマウリのたとえは、それぞれの禪風を賞讃する語。さいごに馬祖先生の藏白海黒については、雲水にあと三〇年修行しな、と馬祖を絶讃しています。

こうして改めて前の「示衆」をみると、これは何と味わいの深いことでしょう。私たちふつうの人間は、日常生活の中で人間同志の葛藤にふりまわされ、言葉のしがらみにしばられてしまっていることが多いかと、今さらながら思いやられます。また、ある出来ごとに対処する方法として、ベストのことはただ一つだという先入観念は決して正しくないことも、三人三様の個性的な智慧のはたらきか

ら教えられます。

同じ事に対する複数の人々の対応について教えられたといえ、にがい思い出があります。私は筆不精のせい、よく一度に何通かの書簡を書いて責めを果たす？悪癖持ち。もうだいぶ以前の、京都の著名な禅寺のI老師と長野在住のO大学教授と一緒に書簡を書き、なんと中味を入れ違えて発送！この大失態に対して、O教授は直ちに速達で返送され、I老師からは音沙汰なし！すぐに三拜九拜の詫状を両者に発送しました。

後日、I老師にはご拝眉の際に鄭重にお詫びしたところ、何とすっかり忘れておられたのにはこちらが仰天！一方、今なお親交を続けているO教授は、この失敗談になど一度もふれたことがありません。相手の同じ失態に対するI老師の磊落さとO教授の老婆親切、ともにすばらしい智慧のはたらきに打たれ、得がたいご教示をいただきました。たまには失敗も悪くないですね。ともあれ、禅の実践はこうした智慧を磨く仏行であります。

# 《特集》

第四次中国仏教遺蹟参拝の旅

## 江西・湖北省の仏教遺蹟を訪ねて

### 禪の源流

團長 椎名 宏雄

「一日不作、一日不食」。いわずと知れた百丈懷海のことばであるが、その背景と意義について知る者は稀であろう。二〇余年前に見た廢屋が大伽藍に復興したのは、いわば時代の推移であり、さほどの驚きではない。が、山奥の上に広がる田園を前に置き、山を背にした百丈寺の佇みにふたたびまみえ、私は改めて時空を超えた唐代の禪道場を目のあたりにした新鮮な感動に打たれたのであった。

それは、今回の江西方面禪蹟巡行を通じて最大の枢軸となつて眼底に刻まれ、一千二、三百年前の叢林生活が何であつたかの理解に、確固たる自信となつた。洞山しかり、五祖山・四祖山・雲居・曹山・青原と、ほぼ同様の風水が織りなす淨域であり、唐代の禪マスターたちは、好んでそこを修道の根拠としたのである。

個々の道場に対する大檀越の支援や、巷への托鉢も多少はあつたであろう。だがしかし、何百もの修道者が生きるためには、当然、彼等自身による農耕や普譚作務が、大きな比重を占める。百丈の美田は、唐代の開山が開いたのだという伝承が今なお村里に伝えられているのも、むべなるかなの感を抱く。

初唐の四祖や五祖の時から作務は坐禪と同等の仏行とされた、という卓見を最初に指摘したのは宇井伯寿博士であつた。たしかに、「作務」の言葉は五祖弘忍をもつて嚆矢とし、五祖は率先してこれに従事したが、私はその内容を主として農耕であつたと確信するのは、江西・湖南の唐代禪蹟を見聞したからであり、その感はますます増幅する。

とまれ、彼等の農耕などの作務は必然的に「行」とされ、坐禪と同等の価値が付与された。その意義の大きさは、以後の禪がいちじ

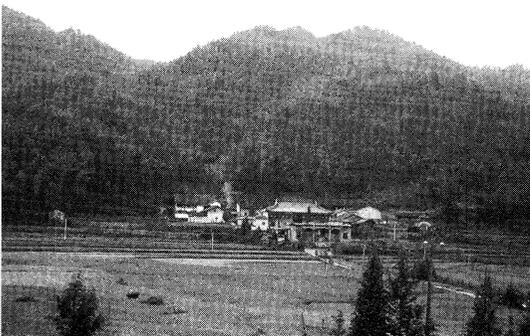
るしく日常的となり、卑近な現実の生きざまの中に深い真理をみようとすることはたつきが、現実を重んじる中国人たちの心をとらえ、全国的に禪が風靡していったという史実がすべてをものがたる。

こんにち、禪は世界的規模で注目されているが、その原点こそは、まさしく唐代叢林の修道生活にあつた。インド的な封鎖性の強い思惟や坐禪を、中国禪は大らかに日常生活の中に開放したという説が、私にとつて文字どおりズシンと胸落ちさせてくれたのが、今回の江西を中心とする禪蹟巡行であつた。その意味では独善ながら、行路の難儀は、かえつて塵煙を絶した秘境を感じさせてくれた点で、むしろ法偉であつた。と同時に、今生ではもう不能と思つていた曹・洞の源泉に親しく詣ることができ、大きな欣びであつた。

団員の各位には、外国人などほとんど訪れることもなく、現地のご案内すら予測できぬ苦渋の行程

の連続であつたにもかかわらず、「善きをとり悪しきに黙する」ボサツ行に対しては、ただ限りなき敬意を表します。また、今回もお世話になつた神宮寺氏と趙氏、それに現地における大勢の法師さん方やガイド諸氏の労苦に対しても、心から感謝するしだいでありませう。

多謝 合掌



現在の百丈山全景

# 江西雲游

副団長 小畑 節朗

今回、江西湖北の八日間の祖蹟  
拜登の旅が無事円成いたしました  
事は、仏天の御加護と五十嵐さん  
始め関係者の一年余に渉るご苦勞  
のたまものと深く感謝申し上げます。

中国が対外開放を始めた一九七  
〇年代後半から駒澤大学中国佛  
史蹟參觀団による祖蹟拜登が始ま  
つて以来、その概要メンバーでお  
られた椎名老師は、昭和六三年  
(一九八八)の『中国佛蹟見聞記』  
第九集の巻頭言に次のような言葉  
を述べておられる。

「およそ禅を学究するほどの者は  
大いに中国の祖蹟を見聞すべしと  
いたい。筆者はかねてから、禅  
の本領は修行にあり、その原点は  
坐禅と行脚徧參にあつたと考えて  
いる。広漠たる大陸の祖蹟をたず  
ねるに従つて、それはますます実  
感として迫る。日本人の今目的環  
境では、往古における禅者たちの  
勞苦を知り語録を正しく会得する  
のが一層むつかしくなるのではな  
いか、と思うからである。」と。

道は悪路泥濘、とても普通の観  
光旅行では考えられない厳しい場



復興された静居寺大雄宝殿

面もありましたが、私としてはも  
う二度と来られないであろう、青  
原下洞門の祖蹟を拜登出来たこと  
は誠に有難く、九江のホテルでの  
新資料敦煌本による『六祖壇經』  
五祖と六祖との相見伝法の一段を  
ご提唱頂いたことも正しく一期一  
会のことと感銘また新たななるも  
のであります。

特に洞山・曹山に於ては、開山  
老古仏に茶菓を献じ一弁の香を薫  
いて報恩諷經を為し「後昆を覆蔭  
して祖風永く扇がんことを」とお  
誦え出来たことは、これに過ぎる  
法幸は無しと言わざるを得ません。  
いささか拙詩をもつて感懐にい

たしたく存じます。

一、 洞山 逢渠橋上一徑通

祖庭殘雨淡煙籠、  
翠竹繁陰一徑通。

淨域山川知節序、  
開秋の歴蓼花紅。

洞山 逢渠橋上一徑通ず  
祖庭雨残りて淡煙を籠めれば、  
翠竹の繁陰一徑通ず。

淨域の山川節序を知つて、  
秋を開いて的歴たり蓼花の紅。

二、 百丈山、熟新稻

獨領先蹤隔俗塵、  
山奇水秀自清新。

登臨応見熟新稻、  
千歲猶余不食眞。

百丈山 新稻熟せり  
獨り先蹤を領して俗塵を隔て、  
山は奇にして、水秀で自ら清新。  
登臨に新稲の熟すを見るべし、  
千歲猶余不食の眞。

\* 不食 一日不作、一日不食。

三、

雲居山 開扉一片情

禪院閉門日夕傾、  
佛燈影冷草虫鳴。

山僧試問憐征客、  
薄暮開扉一片情。

雲居山 扉を開く一片の情  
禪院門を閉して日は夕に傾き、

佛燈は影冷かにして草虫鳴く。  
山僧試に問いて征客を憐み、  
薄暮扉を開く一片の情。

四、 藤王閣 繁華競逐

金風爽氣入江西、  
贛水要津發萬財。

往昔繁華今競逐、  
方知改革大觀開。

藤王閣 繁華競つて逐わん  
金風の爽氣江西に入れば、  
贛水の要津萬財を發す。

往昔の繁華今競いて逐い、  
方に改革を知て大觀は開けり。

\* 往昔繁華今競逐 王安石詩、  
“桂枝香”の一句、念往昔繁華競  
逐



洞山に到る逢渠橋

# 〈江西・湖北省仏蹟参拝旅程〉

九月四日～一日 (八日間)  
 総バス移動距離 一、六六〇キロ

九月四日(バス移動距離二〇キロ)  
 午前 成田→上海(日本航空)  
 午後 上海→南昌(中国東方航空)  
 宿泊・南昌グロリアホテル

九月五日(二四〇キロ)  
 八時～一二時半 南昌→百丈山  
 悪路車を押す

一二時半～一四時半

百丈山参拝  
 印演和尚と村人が出迎える

天下清規、野狐岩  
 昼食は手作り精進料理をいただく

一四時半～一九時

百丈山→南昌  
 悪路、宿泊・南昌グロリアホテル

九月六日(四四〇キロ)  
 八時～一二時半 南昌→洞山  
 悪路

一一時半～一五時

洞山参拝  
 法要・祖師堂参拝  
 住職のご好意で寺にて昼食をいただく

一五時～一七時半

洞山→雲居寺  
 バスで標高八〇〇メートル登る

九月七日(七〇キロ)  
 九時～一二時 盧山観光

一二時～一三時

一三時～一七時半

雲居寺参拝  
 日没で閉門のところ参拝の許可をもらう

雲居寺→盧山  
 標高一〇〇〇メートル  
 宿泊・盧山

一七時半～一九時半

雲居寺参拝  
 日没で閉門のところ参拝の許可をもらう

雲居寺→盧山  
 標高一〇〇〇メートル  
 宿泊・盧山

九月八日(二二〇キロ)  
 八時～九時半 九江→五祖寺  
 九時半～一二時半 五祖寺参拝

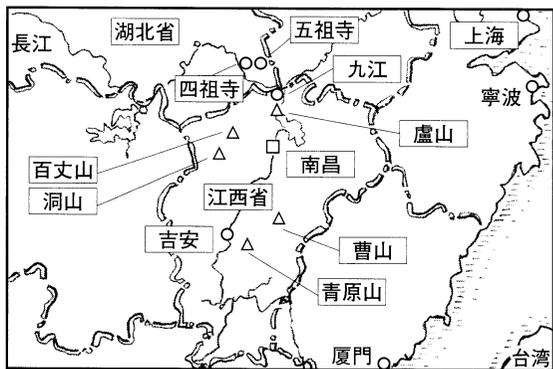
一一時半～一三時

一三時～一四時半

一四時半～一六時

一六時～一八時

一八時～二〇時



江西・湖北省仏蹟参拝地図

九月九日(三六〇キロ)  
 八時～一二時半 南昌→崇仁  
 悪路

一二時半～一三時半

一三時半～一四時半

一四時半～一五時半

一五時半～一七時半

一七時半～一九時半

一九時半～二一時

二一時～二二時

二二時～二四時

二四時～二六時

二六時～二八時

二八時～三〇時

三〇時～三二時

三二時～三四時

三四時～三六時

三六時～三八時

三八時～四〇時

九月一〇日(二六〇キロ)  
 九時～九時半 マーケット見学  
 九時半～一一時 吉安→青原山  
 一一時～一二時 青原山参拝  
 一二時～一三時 ホテル昼食  
 一三時～一五時半 吉安→新建  
 一五時半～一六時半 八大人記念館見学  
 一六時半～一七時 南昌→佑民寺  
 馬祖の開元寺参拝 宿泊・南昌グロリアホテル

崇仁のホテル昼食  
 崇仁→曹山  
 曹山参拝、尼僧の道明さんの出迎えを受ける

法要、祖師塔  
 曹山→吉安

悪路、また悪路  
 宿泊・吉安賓館

九月一日(五〇キロ)  
 六時半～七時 ホテル→空港  
 七時半～八時半 南昌→上海(中国東方航空)

八時半～一六時 上海市内観光  
 リニアモーターカー(時速四三〇キロ)  
 上海→成田(日本航空)

# 百丈山へ

千葉市 寺田 哲朗

「一日作さざれば一日食らわず。」  
で有名な百丈禪師の寺が第一日目の参拝地です。ホテルに迎えに来たのは観光バスではなく、三台のワゴン車。山道なので大型車は通れないとのことです。

途中百キロくらいまではいい道路でしたが、その先は舗装のない山道を迂回し、一時頃にやっと期待の百丈寺に着きました。

近隣のおばさんを動員してつくって頂いた精進料理の昼食に「好味！」と、俄か覚えの合掌。おばさん達の笑顔から、多分通じたと合点しました。

寺は復興中で、天王殿の布袋様と両側の守護神像、大雄宝殿のご本尊、祖師殿の百丈禪師像は新しい金色に輝いていますが、仏殿の修復は未完で、痛ましいのです。

『明珠』三号（一九八六）「百丈野狐」によれば、ご老師が当時からさらに四年前、この遺跡を訪れた時は無任の荒寺だったとのこと、当時と比べれば必死の復興でされたのですが、「一日不食」や「百丈野狐」ででき上がった大叢林のイメージと合いません。千二百年の時が経っているのですか

ら当たり前の苦なのが、私の想像力が足りないのです。かの「荒城の月」を作詞した土井晩翠は廢墟となった城址に佇んで、往時の武士の酒宴の光景を見、この詩に感激した滝廉太郎が作曲を完成させたというその想像力が。

裏山は孟宗竹の林で「天下清規」の大石までは行きましたが、「野狐岩」は離れた場所にあり、寄れませんでした。

帰りに振り返ると前は田圃、後は山。三日後のご老師様のご提唱によれば、それまで托鉢に頼っていた修行僧の集団が自給で作務によって農作をするようになったのが、修行の大きな転機になったのだそうです。

## 盧山は烟雨

有名な蘇東坡の詩といわれる、

「盧山の烟雨 浙江の潮

未だ到らざれば 消えず千般の恨  
到り得て帰り来れば 別事無し

盧山は烟雨 浙江は潮

を読んでから、ぜひ一度盧山に行つて見たいと思つていましたが、これが叶えられて大満足です。

所がこの詩は風景のことを言っているだけではなくて、自己の境地のことを言っているのだそうです。幸い名勝盧山に行けたことを

百丈寺の印演和尚と語る団員たち



励みにして、坐禅を続けたいと思います。

一般のツアーでは決して訪問することのない祖蹟参拝に参加できたことについて、団長ご老師様はじめ小畑副団長、五十嵐秘書長、松井会計幹事、ご同行の皆様には厚く御礼申し上げます。

## 洞山普利寺を訪ねて

沼南町 添田 昌弘

五十嵐さんに作つて頂いた旅行のパンフレットに「洞山寺は南昌市から西方五〇kmの地点にある。」と書いてある。前日に訪問した百

丈寺は「南昌市から自動車で西方へ一八五km」とあり、往復に泥濘の道を一泊かかった。地図で見ると洞山寺は百丈寺の南一〇km位の感じである。洞山寺は昨日訪問する予定であったが、時間を大幅にオーバーし今日になった。今日も一日かかりそうである。

江西省の省都である南昌市は人口一七〇万人という近代的な町でビルと工場と道路の建設があちこちで目立ったが、山中のお寺までは道路の整備がまだまだである。

上海から通じているという高速道路を降りて、しばらく舗装された道路を行く。お寺に向うため幹線を外れると赤い土の泥濘の道となり、時速一〇km位で進むことを強いられる。

途中、泥濘に自動車動かなくなる。石ころを集めて皆で轍に入れ、何とか動き出す。朝八時にホテルを出発し、洞山寺に着いたのは一時半であった。道路が行き止まりとなり、山の中へ石の階段が続いている。四阿風の石の「逢渠橋」を渡り、石畳の道を登ると

広い盆地のような田んぼが現れる。田んぼの先にレンガ色の建物が見える。文革で荒廢がすんだと書いてあったが、修復されているようだ。

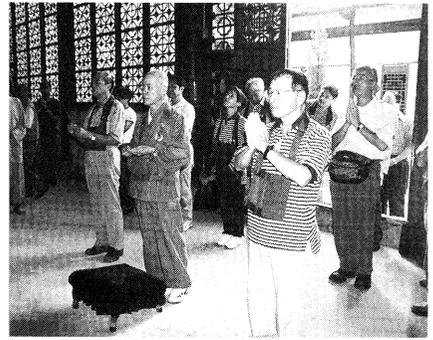
山門に「曹洞禪庭」の字が見える。建物の後に主山があり南側に案山がある。中国の風水に基づいて作られているという。西側に水も流れている。綺麗な水だ。バスの中で中国人のガイドに風水について説明を受けたばかりである。天王殿を通り、大雄宝殿に入って、皆で般若心経を詠む。

やがて雨が降り出してきた。帰りの道路が心配である。裏山に洞山良价禪師の「价師堂」がある。石の段を登り、椎名老師が香語を唱える。

当洞山寺には何人かの僧侶もいるらしい。丁度、お昼なので食事を用意すると言う。三、四〇分程待って、饅頭のようなものに野菜が載ったものが出てきた。急に用意したものであろう。味はなかなかのもので、美味しく頂いた。

「人が引き止めるのではなく、天が引き止めるのである」とこの寺の和尚さんが言ったという。曹洞宗に縁のある我々を洞山禪師が引き止めたのかもしれない。

洞山良价禪師は西暦八〇七〜八六九年の人で唐の後半の人である。良价禪師の法嗣の曹山本寂（八四〇〜九〇一）とともに、曹洞宗の名が興ったという。うっかりしていたが、洞山禪師については、曹



洞山寺大雄宝殿での法要

洞宗の祖師であるということ以外私はあまり知らなかった。『洞山録』という語録があるということも分かったが、見つけれず、読むことが出来なかった。水を渡った際に自分の影を見て豁然と大悟したというのも今回知った。

このお寺は曹洞宗発祥の聖地なのである。

我々のほか訪れる人もなく、静寂のなかにひっそりとしている寺である。宗教とは本来そういう厳粛なものであるとも言える。

中国黄河流域の北地仏教にたいし、長江流域の仏教は江南の仏教という。そこのお寺を巡るのが我々の今回の旅である。

江南の仏教の盛んな様子を唐の詩人、杜牧は次のように詠んだ。

千里鶯啼いて 緑紅に映ず  
水村山郭酒旗の風  
南朝四百八十寺  
多少の楼台煙雨の中

このあたりには多くの文化遺産が残っているのだ。

現在の中国の民衆は仏教に対しあまり関心がないのではないかと立派にお寺を復興することが中国の民衆に何ほどの影響を与えているのか。別のお寺であるが、立派になったお寺の前に物乞いが集まってきたのを見ると、何か割り切れないものがある。

鎌倉時代に、栄西、道元、法然、親鸞、日蓮といった宗教家が比叡山延暦寺から巣立って行った。その延暦寺を作った最澄も約束された地位を放棄して、奈良仏教界に反旗を翻して山に入ったのだ。

鎌倉時代より七五〇年から八〇〇年たっている。民衆の中に生きる新しい仏教が出てきても良いのではないだろうか。これからの世界は寛容のある宗教、特に仏教が積極的に世界に働きかけていかなければならないのではないか。絶対的なものとして排他的な一神教は、世の中に争いを拡大するだけである。そんなことを考えて旅は終わった。

寂かなる祖庭の前の稲熟るる

## 霊峰廬山を往く

我孫子市 三町 勲

廬山は江西省の省都南昌から北方二百キロの九江市の近くにある。九江市は江西省の最北端にあり、長江の南岸に位置して、この長江が湖北省の省境になっている。

廬山は九江市の南側にあり、長江につながる鄱陽湖の湖畔と東に接している。随所に断崖絶壁が鬱蒼とした林木の中にそそり出て奇秀で山水画のような景観を創り出している。

周代に匡俗が隠遁し、周の定王が使者を遣わしたが、既に仙人になり昇天した後で、むなしくその草廬のみが残っていたと伝えられ匡山、匡廬とも呼ばれている。唐の白楽天が「匡廬の奇秀天下の山に甲たり」と絶賛した巨峰である。最高峰は一五〇〇メートルにも達する標高で、全長二五キロにわたって雲海に閉ざされる山並みが重なる。仙人洞、天橋、錦繡谷、観妙亭等我々のわずかな散策の中にも、唐代の李白などが詩文に詠んだ秀逸明媚な風光が散見できた。しかし、一刻一刻と変化する霧雲に戸惑い景観の一瞬を捉えること



が出来なかつたのは、甚だ残念であつた。

仙人洞は断崖絶壁の天然の洞穴で、円形洞口の上に仙人洞の三字が刻んである。唐代に呂洞賓が修行したと言われている。苔むした岩に刻んだ「常楽我浄」の文言の真意は「百尺の竿頭須く歩を進め云々」に通じると考え、一人納得し満足していた。秋には盧山は黄雲万里と更に魅力的な峯峰が色付くであろうと想いをめぐらした。

盧山は仏教の聖地でもある。西山麓の東林寺は浄土教発祥地で浄土教の根本道場であつた。唐代の最盛期には、仏寺伽藍堂塔は三百間もあつたと聞く。鑑真も日本渡航前にここを訪れ、東林寺の智恩と共に来たという。

また、如琴湖の孔雀島の九琴亭は、湖面や湖畔の松の木や高く聳えた峯峰にけむる霧雲と調和して、心の底から我々を癒してくれた。現在の混沌とした世界から、神秘的で神聖な世界に招き入れてくれるようであつた。

今回の中国仏教遺蹟参拝は、人里離れた僻地が多く、艱難辛苦な旅であつた。神宮寺様、宋様はじめ旅行関係者の一方ならぬ御努力に感謝すると共に、これも参禅修行の一環として胸に銘記して置きたいと思ひます。

皆さん、シンク、シンクでした。

## 四祖寺、五祖寺参拝

沼南町 永野 昭治

見性成仏。禪の掲げる旗印の一つです。六祖慧能大師宝壇経の条をふまえて、椎名ご老師よりご提唱がありました。自己に執着し外物に執着する自己の本性をむんずと擱んで見極めたときに、その身がそのまま仏にほかならない。そして坐禪の往到に見性成仏を見据えるべきであると。我利、我欲に引き摺り廻されている凡庸な自分には、禪の説く自由など生じることがあるのだろうか。自省頻りであるが、どうにも仕末に負えない

のが、この一心であります。

仏教遺蹟参拝の旅も五日目を迎えて、漸く五祖寺、四祖寺の順で訪れることになった。胸の中のシヤボン玉は紙風船ほどに膨れて弾けんばかりになって嬉しくなってしまう。昨夜の惑乱はもうない。

幽邃境を思い遣る五祖寺は、専門道場を中心に幾つもの堂宇が、幾度びの戦禍に忍耐して、法燈を護持し続けている壮麗な姿相に、暫し佇むありさまでした。

開創は初唐の六二三年とあります。参禅会でご提唱戴いた『行持』の巻に、五祖大満弘忍禪師（六〇一〜六七四）は、七才で法を得てからのち七四才にいたるまで、仏祖の正法眼をよく保つて、夜半ひそかに己れの袈裟を大鑑慧能に付託したのは叛群の行持である。このことから正法の寿命は断絶することがなかつたと、正法の真髓が述べられています。

大満禪師塔、確坊の遺蹟、聖母殿などが取り分け印象に残っています。大満禪師塔は、二八三段の石段を登り詰めたところに泰然と安置されていました。塔の造立は説明によると、則天武后（六二四〜七〇五）が則天大聖皇帝と称し、国号を周と改めた六九〇年以後に黄梅県の当地御幸の際に、弘忍禪

師の行持に讃嘆して賜与された由。

身の丈一丈二尺余り、基壇は尖に達し、塔身と法輪、宝珠からなるずんぐりとして太つてはいるが、どこか素朴な風格を醸し出しているのがとてもよい。塔身の開口部位は何を意味するのだろうか。香烟絶えるを知らず。合掌。

確坊の遺蹟は、昨夜の提唱に、「六祖慧能黄梅にまみへて法にあひつうず、ついにいしをこしにおふてからうすをふむ。」とあり挿絵が添えてあります。遺蹟は確と石の支柱を残すのみですが、腹ふくる慧能が、大石を腰に結んで確をふむ作務を行じている姿が思い浮んで、破顔一笑。

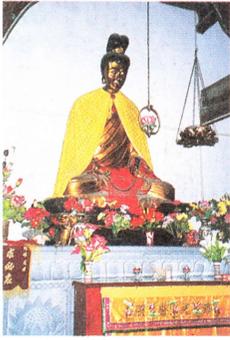
弘忍禪師のご母堂が祀られている聖母殿は、「案」の前面に佛光普照と刺繍された緞子が懸かり、須弥壇は色とりどりの装花で覆われ、聖母像は金色に耀いて眼光是合掌する人々をやさしく愛でています。頭髮は双髻。これに酷似した双髻を結んだ仏像が東京国立博物館の法隆寺献納宝物の一つにありました。身の丈僅か二〇厘余りの小金銅仏で、双髻の摩耶夫人像です。夫人の袖口から合掌した釈尊誕生する姿が見られます。おそらく六世紀中頃までに中国から渡来したであろう止利派の工房での作品と

思われます。暫し留まり居ると、我が国の七世紀から八世紀の飛鳥古京の景観が、彷彿としてきました。

愈々四祖正覚禪寺です。四祖道場の扁額は、五祖寺と同様今なお専門道場であることを告げています。釈迦三尊が摩訶迦葉尊者と阿難尊者を眷属とし、十八羅漢の守護する大雄宝殿は、芳香漂ひ莊嚴従容で、与楽抜苦の仏光は、無辺に満ち充ちています。合掌。

祖師殿には、始祖菩提達磨大師から六祖慧能大師にいたる六尊者の像が奉安されています。四祖大医道信禪師は、心を集中し、脇腹を床につけずに眠ること六〇年に及び、その徳は人界天界を覆った。唐の太宗皇帝の赴京の詔告を四たび辞退し、身も命もものともせず保った行持は、これこそ千年に一度の稀れなものである。

知るべし、と『正法眼蔵』行持の巻は示しています。広大な寺域は風籟も鳥禽の啼声もなく、ただ



五祖寺の聖母像

工房の仏像刻鑿の響きのみが大気をかすかに揺震させていた。

単独では決して実現することのないこの中国仏蹟参拝の旅は、团长椎名ご老師をはじめ、参禅会勝友の皆々様の渾身のご努力によって大願円成することができました。誠にありがたく感謝申し上げます。坐禅は人を裏切らず、を銘としてこれからも坐り続けてまいります。

合掌

## 涙

四街道市 大坂 昌宏  
このたびの中国遺蹟参拝の旅は、サイパン島での息子の結婚式以来、八年ぶり二度目の海外への旅でした。

観光ではなく研修の旅と自覚して参加致しましたので、好きな酒も最後の晚餐までは飲まず、無我夢中の旅でした。

現地では、秋雨の泥濘に石を埋め、山水田畑水牛を眺め、人々や人家を観ながら、右も左も読めぬ文字を見送り、遺蹟、禪寺を拝観させて頂きました。

しかしながら、なんの感動もありません、一体何のために来たのか、自分は何処に居るんだ、何をしているんだと苦悩の模索を続けなが

ら、ただひたすら諸先達の後を歩いて参りました。

しかし、行く先々の寺院内で釈迦像の前に手を合わせておりまして、心は空っぽになり、何時の間にか涙が滲んでくるのでした。そして人目を憚りながら、涙を拭うのでした。

その都度、今はこれだ、これだいいんだと、自分に言い聞かせながら、次への一步を踏み出して参りました。今は究明できずとも、いつの日か、きっとこの涙は何かを教えてくれるに違いないと念じつつ：

南無

## 感動の旅

四街道市 大坂 晶子

胸高鳴りながら、久しぶりの海外旅行でした。

寺院の荘嚴な、赤と黄で彩色された姿には驚かされました。

ある汚い川では、幼い女の子や大人たちが洗濯をしていました。昼下りのマジジャン、トランプ、スッポンをぶら下げている人。パレット一枚で遊ぶ子供たち。

市場では、さりげなく豚のあらゆるパーツ。生きているアヒルの店での捌き。デパートでは、私の

腕時計を売ればかりの女性。

市街では、無規則といって良いほどの煩雑ぶり。人は信号無視、車は対向車線を越えて、先へとすり抜ける。すべての現状に私は啞然とさせられました。

ただ、この国の将来性には確信を持ちました。歴史、広大な土地、膨大な人口と、どれをとっても素晴らしいものです。正しく将来世界の経済、文化を左右するに相応しいお国柄と感動致しました。

しかし、文化と犯罪は比例しておりません。日本のようにならなければと願っております。

南無



洞山寺に下げられていた雲板

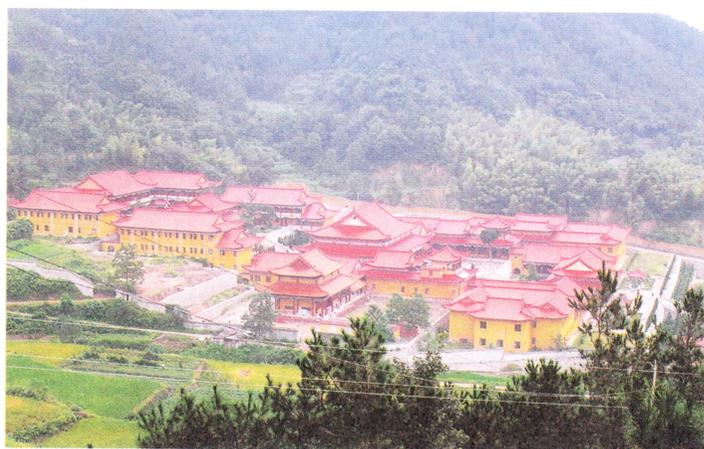
# カラーで見る 中国仏蹟参拝の旅



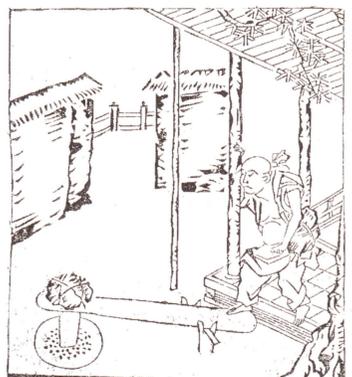
記念撮影後、雨が降り出し、しばし洞山に足止めされる



溪流にかかる四祖寺の花橋



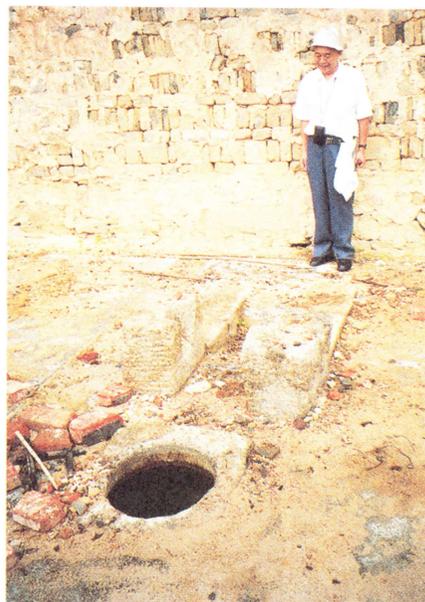
毘盧塔より望む四祖寺全景



唐うすを踏む慧能さん



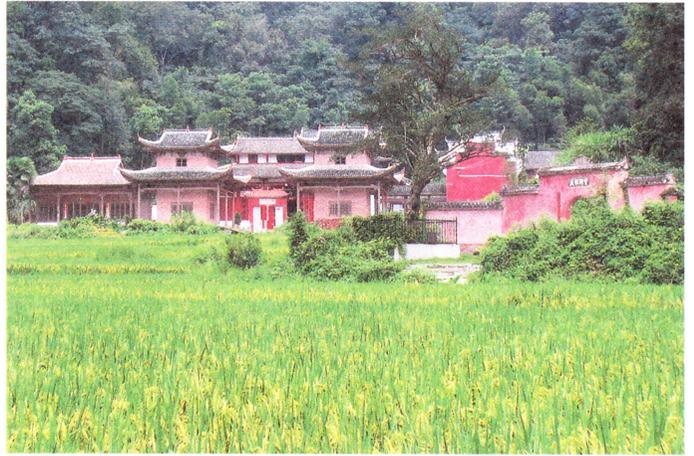
五祖寺山門の前



慧能の米つきをしのぶ永野さん

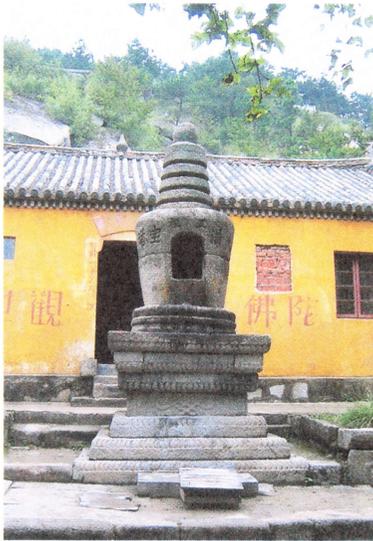


百丈山・印演和尚の温かいおもてなし



山と稲田に囲まれ、洞山は静寂そのもの

五祖大満禅師塔



唐代に馬祖が禅を鼓舞した佑民寺（元は開元寺）

中国・南昌市 宋 小凡

もう一つの禅の発見

これまで、よく臨済宗の団体を江西省のお寺に案内しましたが、曹洞宗の祖蹟参拝団は初めてです。「頓悟」を重んじる禅宗は、臨済宗の「公案」話（奇抜な発想とおもしろい物語）で表現されたものばかりと思っていたが、今回の龍泉院参拝団のガイドをして、新たにもう一つの禅の発見ができたと思われられました。

曹洞禅は、臨済の「公案」禅に対して、全然おもしろくないが苦勞をしてコツコツと修行し、研究する禅だと思います。それは「本来無二物、何処惹塵埃」よりも「時時勤拭拭、勿使惹塵埃」に近い禅だと思います。



曹山の道明尼僧様を囲んで

## 曹山寺訪問記

柏市 今泉 章利

曹山本寂禪師が、九世紀の後半に活躍された曹山寺を訪ねた。曹山寺は、五代末には荷玉山曹山崇寿院、宋代には宝積禪院、明の太祖からは曹山宝積禪院、という称号が与えられていた。また清の時代の石碑も残っており、繁栄した名刹であった。しかし近年の戦争や文革で、大きな仏殿や本寂禪師が礼拝したという雨花岩の石仏等は、全て破壊されてしまった。

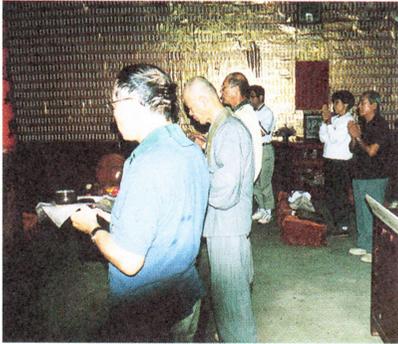
曹山は、南昌より一五〇キロ南方にあり、私達は朝八時にホテルを出発したが、道路の状態が非常に悪く、到着したのは七時間後であった。雨ですべる赤土の道を抜けてようやく到着。目にはいつてきたのは、厳しい寺院ではなく、平坦な広場の向こうに建っている赤い三階建のお寺らしからぬお寺であった。

現在、この寺は、曹山崇寿禪院という尼寺で、香港出身の道明住職他一名の尼僧が寺を守っているとのことであった。仮りの本堂で持参の抹香を薫き、一同で般若心経をお唱えした。若い尼僧さんが、ソニーのビデオで私達を撮っていた。

中庭は発掘作業が進んでおり、あちこちに礎石や台座の一部等が積みまわっていた。奥に聳ゆる銀杏は

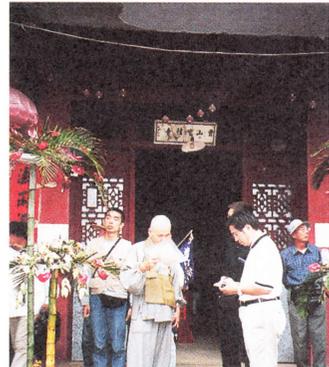
本寂禪師の手植えの木なのだろうが、道明住職によれば、近々大雄宝殿の再建活動を開始するとのことと、資金が集まれば、三年で完成するとのことであった。傘をさしながら、孟宗竹の小道を五分程歩くと本寂禪師の墓所に着いた。

椎名老師が八二年に來られた時に倒れていた墓石は、立派に立て直され、明代の六角の墓石の表面に本寂禪師という文字を読み取ることができた。老師の舍利札文が雨中に響き、心に浸み入ってきた。この曹山寺は今回訪問したお寺の中では最も鄙びたお寺で、近所



曹山本寂禪師への報恩法要

## 仮設の曹山大雄宝殿



の人々が農作物を籠に入れ持ってきて、典座の方々と話をしていたり、犬も走り廻っていたりと、何か本寂禪師のお人柄を偲ぶかのごとくの風景であった。

二三年前の老師の踏査メモを拝見していると、傍で「来た甲斐がありません」という御老師の声が聞こえてきた。あれから二〇年を経て、再建に向け動き出したエネルギーを感じつつ、曹山を一六時半に出発した。訪問時間も短かく後髪を引かれる思いであった。

小雨にけむる曹山寺に咲く真白な木槿を見ながら、本寂禪師をもっと知りたいとの思いがわいてきた。何故洞山を離れ、この様な田舎に來たのか、何故洞山は雲居道膺を法嗣としたのか等々。

バスは一路二〇〇キロも離れた

吉安に向かつて、ガタガタと揺れながら進んだ。

## 青原山靜居寺

柏市 安本小太郎

青原山靜居寺も、川を逆ると両側の山々がだんだんと迫って来て、合わさった所に寺がある。日本でも、この様な寺は何カ所か参拝したが、中国のは規模も大きく川は水量豊かで、水は濁っている。

今回の参拝の旅も七日目、前日の一五時間の強行軍で普段より一時間遅い九時に吉安賓館を出発。市の自由市場を四〇分程みた後、贛江を東側に渡って吉安市の新しい街に出る。こちらは鉄道の駅が出來てから開けた所で、ビルも家も新しい。

左に贛江の支流をみて青原に向った。左右一キロ位のところにんだらかな山が連なり、道中は四メートル位か両側は水田である。二〇分もバスが行くと靜居寺に着く。途中に、赤茶色に白い字で縦書に青原山の碑が現れた。縦横三×一・五メートル位か。ほとんどの人がバスを降りて写真をとる。文天祥の書だそうである。ここから五分も行くと、両側に民家が三〇軒程あり、土産物を売っているとこ

ろもある。

家の尽きたところを右にカーブして、万善橋を渡って寺に着いた。

青みがかった石畳で青原山と横額があり、右に般若、左に解説と小さく縦に書いてある。これが山門。物売もこれより中には入って来ない。次に静居寺の横額を掲げた正門、更に進むと王守仁の書で「曹溪宗派」と横書した石碑がある。縦一メートル、横一・五メートルほど。

その奥が顔真卿書「祖関」の額の掲げた祖師堂で、像は達磨大師であった。廊下を右にとつて、弥勒の化身・布袋さんの像のある天王殿を抜けると大雄宝殿に入る。



青原山静居寺の入口

向って左に迦葉、右に阿難の両尊者を従えた釈迦牟尼仏、さらに左に阿弥陀と葉師の両如来が座している。高さ三メートルはあろうか、壁には十八羅漢像が並ぶ。大雄宝殿の両側に毘盧閣、維摩堂、功德殿、僧堂、二三年前にはこの左側を登って祖師塔に直行できたが、今は伽藍が立ち並び、右に迂回して外側の坂道を上って七祖塔に行くことになった。七祖塔は椎名老師によると、「盧陵県志」より造られたであろうとのこと、高さ五メートル位、直径一・五メートル位の八角形。七重で、白い壁の各階に一階より右廻に初祖達磨、二祖慧可、三祖僧璨と各祖師の姿が描かれている。七祖青原行思禪師は六祖慧能の法を嫡いだ吉安の人で、この系統より曹洞、雲門、法眼の禪三宗へと継っている。

七祖塔を拜して、砂まじりの坂を降る。左に川が流れているが塀に遮られてみえない。右の伽藍は、八世紀の七祖の時より、建設と破壊をくり返して、最後に文化大革命により徹底的に壊され、一九九四、一九九八年現在の形を整えた。中国建築は軒先のはね上った伽藍など、シャッターチャンスは多いが、フィルム切れで写すことは出来なかった。坂を降り終ると、右

側に石刻の碑群があり、顔真卿書「祖関」の原盤があった。

一時間余りで静居寺を後にしたが、帰る前に祖関の前に佇んだとき、不思議な静寂に出合い、ここは禪定を修するには適地だと思つた。ガイドの宋さんの風水からみた地形では、今回訪ねた寺々では青原山静居寺が一番とのことである。伽藍は北に面し、周りを三百メートル位の青原の山々が囲んで、寺の囲りを溪流が流れる。

我々の訪れたのは九月一日であったが、諸堂を巡ると汗ばんだ。吉安市は沖繩と同緯度であり、寒さより暑さ対策が重要ではないか。東南を囲む青原山により、夏の熱風が遮られ、快適な坐禅環境の中、七祖青原行思を慕って集つた行者達から、四代目洞山良价、五代目曹山本寂が輩出した。その約四百年後の天童如浄禪師から道元禪師へ、更に七百年を経て、現代に只管打坐の曹洞禪が伝わってきたのだとしみじみ思つた。

## 「百丈清規」と「作務」 についての雑感

さいたま市 美川 武弘

省都南昌市の西方二〇〇キロ、

三台のマイクロバスは幾つかの集落を抜けて、上富村から一路百丈寺のある甘房村へ向う。甘房より一面の孟宗竹の生い茂る林を縫うように登る山道へ。

山道をあえぎながら走ること二時間余り、窓外の峡谷風景を楽しみ余裕は更々なく、ひたすら未舗装の山道を走る車との壮烈な戦いはじまる。上下、左右そして前後に激しく揺れ動く車の座席にしがみついているのがやっとの有様。近頃このような道を走るのは珍しい。山道を登りつめると、四方に山々を望める広々とした田園風景が広がる。

目指す百丈山大智寿聖寺は、北西に峻立する大雄峯(百丈山)に通じる低い尾根に抱かれている。

百丈寺は、大歴年間(七六六、八〇)、唐の中頃、禪宗六祖で南宗禪の祖、慧能禪師から法を嗣いだ南嶽懷讓の弟子、馬祖道一に師事した百丈懷海(七四九、八一四)により大雄峯の山間地に建立された古刹である。寺は一時荒廃したが、北宋時代の元豊年間(一〇七八、八六)に復興された。明代にしばしば修復されたが、清代に入つて衰亡した。

遠い日本国からの訪問客、彼らには珍しい団体訪問客を迎える百

丈寺では、僧をはじめ、寺に働く善良そうな老若男女の人達から大変心温まる歓待をうけた。彼ら一人一人の素晴らしい笑顔が大変印象的だった。

現存する大雄宝殿での参拝を済ませた後、我々は、孟宗竹の生い茂る寺の裏山の中腹へ案内された。そこには柳公権の「天下清規」の文字が刻み込まれた大石があった。初めてこの文字に出会った私には、「天下」は読めるが、恥ずかしなからさで、「清規」はどう読むのかわからない。「天下セイキョ」なのか「シンキョ?」と読むのか、皆目分らない。後で調べて分かったが、これは「シンギ」と読むのが正解。

「清規」とは：そういえば、百丈寺の山門にも、「天下清規発祥地」云々と書かれていたことに気がついた。帰国後、詳しく調べてみると「清規」とは禅宗の仏教用語でこう記されていた。

〈清規〉禅宗、禅院は清浄を最も尊ぶ。その清浄なる禅僧が守る規則の事。

僧は世俗の塵埃から離れて山に入り、托鉢によって施主の喜捨を受けて修行に専念する。自らを「清衆」として位置付け、行持作法を重んじるのである。清衆の定

めた規則という意味で清規とよんでいる。

百丈山に禅の修行道場を開いた百丈懐海禅師の最大の功績は、禅院独自の生活規範として清規を制定したこととある。それは釈迦以来の律に代わるものであり、中国仏教の独自性を高めるものであったという。

再び、裏山から寺の境内に戻ると、そこには大変質素ながらも、心のこもった昼食が用意されていた。我々を迎えてくれたあの純朴で善良そうな人たちが、皆一緒になって心を込めた精進料理は、大変美味であった。



「天下清規」の前で美川さんご夫妻

最後に、清規を制定された百丈禅師、自らも厳格に規則を守り、「一日不作一日不食」(一日なさざれば一日食らわず)という有名な言葉も残している。

禅師は高齢にもかかわらず、日々、田畑にて野良作業に励まれた。老齢を氣遣った弟子たちが野良作業を止めさせようとして、ご老師が使用される農耕作業の道具を隠したところ、ご老師曰く、「働かないのであれば食事はとらぬ」といって、頑として一食も口にしなければというエピソードは有名である。

われわれが気軽に考えていた「作務」とは、本来は、このように他人の手を借りず可能な限り自給自足のために、全員が混然一体となつて共同の目的に向つて力を出し合い、汗を流し合うということらしい。このように「作務」は、元来は命がけの労働であり、禅的生活の本質的な特長でもあるのだ。

「作務」とは一体何かということとを改めて考えさせられた。いろいろと書き連ねたが、紙面の関係でここで一応筆を置く。

今回の中国の江西・湖北の仏教遺跡参拝の旅では前回にも増して、いろいろと学ばせていただいた。チャンスがあれば、次回の第五次、

第六次の中国仏蹟巡拝の旅にも是非参加させて欲しいと願っています。多謝多謝。

## 龍泉院中国仏蹟参拝団に参加して

駒澤大学大学院 程 正

このたび、勝縁に恵まれて、私は龍泉院中国仏蹟参拝団の一員として、中国の江西省、湖北省の仏蹟を参拝してまいりました。中国の上海生まれの私にとっては、今回の仏蹟参拝の旅が実に二年ぶりの帰郷でもありました。祖国の日進月歩の変貌ぶりに驚くことばかりでいた私には、感慨深いことが実に多かったのであります。これらはさておき、今回旅の感想について簡単に述べさせていただきますと思います。

今回参観した主な中国の仏蹟は、江西省の百丈寺、洞山寺、東林寺、曹山寺、静居寺、佑民寺、湖北省の五祖寺、四祖寺であります。東林寺を除けば、いずれもが中国禅宗と深く関わっていた名刹であり、特にそのうちの洞山寺と曹山寺は、曹洞宗の発祥の地としてその名が広く知られています。これらの禅宗の名刹を初めて歩き回った私が

受けた印象は、カルチャーショックに匹敵するほどのものもありました。

駒澤大学で一〇年近く、中国禪宗史を勉強してきた私は、これらの禪宗の名刹に関する種々の逸話などを耳にしたことができるくらい聞かされてきました。それにもかかわらず、私の目の前には、予想もしなかった光景が次々に繰り広げられました。百丈清規で江湖に名を馳せた百丈懷海には、「一日不作、一日不食」の名句が残されており、従来「一日作さざれば、一日食らわず」というふうに読んでいましたが、実際に現地に行ってみますと、椎名先生が指摘された通り、むしろ「一日作さざれば、一日食らえず」と読むべきであります。なぜならば、百丈山は、町からほど遠い山奥にあるが故に、交通の便が極めて悪いのであります。そのために、当時の百丈山の日常運営は、農耕による自給自足を中心とした生活スタイルが強いられていたとも考えられます。

このような発想は、現地に行かずして、その言葉の文字面から決して読み取れないものであります。このような感触は、今回の旅の全行程を通して随処にみられたのであります。このことを通し

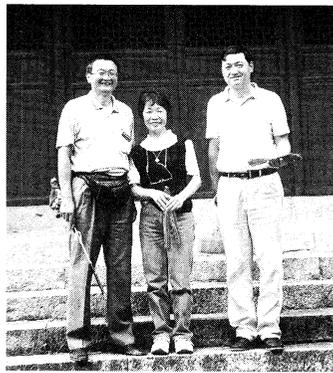
て、日頃、デスクワークで中国禪宗史を勉強している私にとって、フィールドワークというものがいかに大切かということについて、痛感させられたものであります。今回の旅で得た貴重な経験を生かし、今後の研究にも反映していきたいと思えます。

末筆ながら、大変楽しい旅が出来たことを、団長の椎名宏雄先生をはじめ、メンバーの皆様には厚く御礼申し上げます。

## 仏教遺蹟参拝中

埼玉大井町 石田 七重

この度の研修旅行では、椎名御老師、小畑さん、五十嵐さん、同行された皆様は大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。若い澁刺とした好青年、程さ



ガイドの宋さん(左)、張さんと

んには、気軽に何でもお尋ね出来、買物事はいつも快く助けて下さり頼もしいことでした。

一日中のほとんどをバスで移動、その中、度々困難に遭遇する印象深い旅となりましたが、どんな場面でも御老師は静かに穏やかに見守られ、先生の下に学ぶ参禅会の方々の優しく、美しい心根に触れた旅でもありました。そしてその場、その場での神宮寺さん、張さん、宋さん、現地の方々の真心からの対応は心温まるものでした。

日本人でも、中国人でも「人の本性は善」を確信しました。これは予定通り、日程通りの旅では決して得られぬ貴重な宝となりました。

中でも忘れられないのは、曹山寺へ行って帰りの事でした。悪路に困っていた折、その村の小柄な女性が、私達の様子を見ていましたが、程なく身を翻して家から工具を持って来ました。そしてガイドさんに渡し、その女性は、バスの後方を男性の方と一緒に押してくれているのです。バスの中から見ていた私は、胸をつかれた思いで居りましたが、どうやらバスが動けるようになったので、お礼を伝えたくバスを飛び降りて、追いかけてきました。しかし、既に姿はありませんでした。ああ、これこ

そ椎名先生の説かれる陰徳ということだ。さすがに今も禅風の吹いている村の方だ、とあの女の後姿が今も心に強く残っています。

また、廬山で皆様に祝って頂いたバスデーも、生涯忘れられぬ日となりました。九月六日、この日予定より大分遅く廬山のホテルに着きました。私の名入りの大きな大きなケーキが待っていました。大男の講談語り師の宋さんが持つて来て下さり、「四特酒」なる美酒を何回も乾杯、ケーキカットは優しいお顔の大男の張さんの介添えでした。

九月一〇日、レストランでのお別れ晩餐会では、ドライバーの呉さんのスピーチに酔いました。私はホテルまでバスに乗らずに歩きました。その折、一緒に下さった神宮寺さんと張さんが、小さな薄暗い紙屋さんを見つけて下さった。最終日に初めて念願の紙との出会い！

お二人のご親切で安徽省の美しい画箋紙を求めることが出来ました。嬉しいことです。とつてもうれいことでした。御老師はじめ皆様有難うございました。尚、蛇足ながら推敲出来ぬままの拙い紀行詠を記させて頂きます。合掌

- バス停に二頭の水牛つながれて誰を待つらむ人の影なし
- 山道の悪路にタイヤ取られたるを克服して着く百丈寺
- 大岩に刻され伝はる「天下清規」柳公権の骨氣を探る
- ご老師が五体投地を行されて心経唱和為す百丈寺
- 夕暮れて家々の灯す電燈の乏しきものぞ奉新の街
- 豊かなる実りの時節の宜豊県水牛もあひるも禅の一コマ
- 山越えのぬかるみの道にタイヤ取られ我が乗るバスは動くともなし
- 穏やかな田園に暮す人の中に困惑の旅行者助くる女あり
- 多彩なる食物テーブルに満載し旅人もてなす山中の寺
- 水牛が居れば必ず白鷺の三羽四羽いる美しき共生
- 自動車の行き交ふ路を悠々と経行するがに子連れの水ゆく
- 洞山寺に雨やどりする旅人に雲水の賜ひし湯麵胃に染む
- やうやくに廬山の宿にたどり着けば大きなバースデーケーキ我を迎へる
- 天覆ふ孟宗竹に音もなく時雨のしるき曹山禪寺

## 永く長い

## 洞山・曹山への道

柏市 五十嵐嗣郎

江西・湖北省の仏蹟を巡る第四回中国仏蹟参拝の旅は、これまでのツアーでは経験した事のない色々なトラブルに遭いながらも、ツアーコンダクターの神宮寺さんを始め、中国側のスタッフの懸命の支援により、無事円成することができました。

それにしても今回の主目的地である洞山や曹山への道のりは、非常に永く長いものでした。椎名老師の発案で、江西・湖北省の仏蹟を参拝する旅が持ち上がったのが、一昨年の秋でした。すぐ神宮寺さんと計画に着手し、ご老師のご意見をお聞きしながらプランを作成しました。昨年の一月の参禅会と二月の新年会でプランの説明をしたところ、二五名を超える方々から参加申込みがあり、順調に滑り出したかに見えました。

しかし、北京から発生したSARSが連日マスコミで報道され、SARS患者が中国全土に蔓延しそうな様相になって来たのです。企業では中国への出張を禁止するところも出て来たり、旅行会社も

中国ツアーを中止するなど、とても中国へ旅行に行く事を、口に出して言えるような雰囲気ではなくなってきました。ご老師・小畑さんと相談の上、やむなく中止することにしましたが、参加希望者の多いツアーなので、中止してしまうのは大変惜しい気がしたものです。

いい加減なSARS対策で、外国からの観光客の急激な減少に驚いた中国政府が、本格的なSARS対策を施した事や、夏場の暑さで、流石のSARSも姿を消していきました。そこで昨年の秋再び計画に着手し、今年一月の参禅会と新年会で再度説明し、参加者募集を始めたところ、今度は中国各地で鳥インフルエンザの発生が報道され始めました。

またもや計画を断念しなければならぬのかと危惧されましたが、幸いにも大事に至らず、九月に予定通り成田を出発する事が出来ました。しかし、この時洞山・曹山への道のりがあれほど大変永く長い時間がかかろうとは、思いもよりませんでした。

詳しい事は洞山や曹山を担当した紀行文に書かれていと思いますが、道路工事で掘り返された赤土の泥道に、バスのタイヤがもぐ

## 立ち往生のトラックが行手を遮る



り込み、立ち往生する事が何度も何度も続きました。その都度バスを降り、タイヤの廻りに石を敷き、バスを押ししたり、ブルドーザーの出動があったり、これまでの中国旅行では味わった事のないトラブルに次々と巻き込まれ、正直今回の旅は無事済むのか、不安にかられた事もありました。

悪路のため洞山参拝が予定日より一日遅れたり、雲居山への参拝も閉門時間を大幅に遅れ、ご住職に日本からはるばる参拝に来た旨を伝えて、どうにか開門していた

だいた事もありません。

悪路の圧巻は曹山参拜の日でした。撫州市から始まる百キロの泥道を、バスはのた打ち回って時速一〇キロ位しか走れません。その内夜になり、暗闇の泥道の中を懸命に進路を探しながら進むバスの呉運転手さんも、一〇時間に渡る過酷な運転で、疲労もピークに達していると思いますが、泥道は果てしなく続くのです。

ようやく吉安のホテルに到着したのが深夜の一時半過ぎでしたが、ホテルの方々は食事の用意を待っていてくださり、我々が到着すると、すぐに温かい食事を出していただきました。呉運転手さんやホテルの方々には感謝感謝の一日でした。

とにかく曹洞宗の開山に当る洞山・曹山へは、時間が大変永くかかり、距離も大変長く感じさせられたツアーでした。

## 再び仏教伝来の旅に参加して

沼南町 松井 隆

龍泉院の参禅会に参加しての喜びは、中国を経て日本への仏教伝来の旅を辿る機会を得たところに

もあります。第一回の旅は、上海周辺の五山を巡る旅で、道元さんが寧波の港に着き老典座に会い「仏道の実践たるや何ぞや」の会話に始まり、如浄禪師から引導を受ける迄のドラマを想像させてくれる旅でした。

第二回は、高山少林寺において面壁九年の末、達磨大師が禅宗を創始し、二祖慧可禪師に引き継ぐ断臂のお話。また、シルクロードの西の玄関である長安を見て歩き、あの三蔵玄奘がインドまで旅し、大雁塔において経典を翻訳した中に、般若心経のベースがあることを確かめた旅でもありました。

第三回の旅は、第二回の延長にあるシルクロードの旅です。あの茫々のタクラマカン砂漠には、莫高窟を代表とする仏教壁画の宝庫があり、法隆寺の壁画の原点ともなっている。また、ヨーロッパと東洋の文化交流の中で、仏教がひしひしと伝えられてきた道程を確かめる旅でもありました。その中では、三蔵玄奘の西遊記の旅を体験すること、孫悟空がよきアシストとして目的をかなえた当時の多難な旅を、迫力ある大自然が想像を大きく湧かせてくれるものであります。

そして、今回の第四回の旅は、

達磨大師から継がれ続いてきた禅宗のうち、「行持」の巻でも主役となる四祖から七祖、洞山、曹山、馬祖、百丈さん辺りまでの、椎名老師の提唱「行持」の巻の主役が活躍した江西省や湖北省の比較的田舎を巡る旅でした。

中でも六祖慧能さんの生い立ちから、八箇月昼夜を通し、米搗き弁道した場所を目のあたりにし、当時の修行の凄さから、恵まれ過ぎた生活の中の自らの不甲斐無さをつくづく考えさせられる旅でした。

インドでお釈迦様に端を発し、達磨さんと今回旅した辺りの各祖師、また、如浄禪師から道元さん



お別れパーティーで乾杯！

が引き継いでこられた正法について、そのディテイルを分かりやすく解説していただいた椎名老師のご努力に深く感謝し、脈々と受け継がれてきた仏教伝来の大きな展開を、幾度となく蘇らせて下さるこの参禅会に敬意を表し、改めて感謝申し上げます。

この上は、インドの「仏陀に出逢う旅」により、仏教伝来の旅の総集編として成就することを望みつつ、一層仏道を精進してまいりたいと思う次第であります。合掌

## 慧能の経路

柏市 清水 忠

今春、少林寺坐禅会で典座作務の折、参加のお誘いを頂き、四祖・五祖・六祖から馬祖道一・百丈・懐海・黄檗希運などの関連ある寺が含まれていたのが魅力で、早速皆様の驥尾に付してお供させて頂くことにしました。

そのため事前に勉強させても頂けましたし、「鄂」「贛」などの地名はもとより、黄梅県といつても何省にあるのか、江西省でさえ全く不案内の私が、六祖慧能が南方へ逃げたということだけを頼りに、何処を、どう通ったのかなどという疑問を持つようになりまし

たのも、事前の勉強からでした。

たまたま私は、縁あって江西省大余県の貧困家庭の子供たちから青森県有志の方々への感謝状の翻訳をしていましたので、江西省はその意味からも関心があり、調べているうちに、慧能が追手の恵明に追いつかれた大庾嶺（無門関第二三則〈不思議〉と大余はともに発音が同じ（声調稍不同）で、何やら関連がありそうに思われました。

結果は、以下のように疑問が解きました。

### 慧能の経路

湖北省黄梅県から舟で長江岸小池へ、長江を渡り、鄱陽湖に入った後贛江を遡り、贛州から支流を遡行して大余で舟を降り、以後は徒歩で大庾嶺を越えた。大部分は舟運によったものと思われます。（慧能に衣鉢を伝え南方で時機を待てと命じた後、弘忍が川岸まで送って「我探船送汝」と言ったというのは舟運を示唆しています）

### 大余県の昔

今でこそ辺境の田舎町ですが唐代では舟運のターミナルとして中国南北交通の要衝でした。慧能が通った頃（六七〇）から百年ほど後、馬祖道一が能仁寺にあり、百丈寺が創建された頃、長い石段の上に

梅嶺という関所ができ、以後贛の財政に大きく貢献したと言います。

外にも、印象に残る柳公権書の「天下清規」石刻、百丈野狐公権の野狐巖、「嶺南の獨獠」慧能が七ヶ月働いた五祖寺の確坊跡や石臼は、恐らく今後一生忘れることはないでしょう。

悪路の強行軍もまたこの思いを一層印象深くする結果となりました。椎名先生はじめ龍泉院参禅会の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。 合掌

## 中国古寺参拝旅行に参加して

船橋市 山本 哲弘

今回の旅行に突然のお誘いを受けて、余り深く考えもせず、参加させていただきましたが、結果としては大変よかったですと感謝致しております。達磨大師より始まる禅宗の源流ともいふべき、江西省、湖北省の諸寺を自分の目で見る事が出来、また、人々の現在の生活を実感することができたからです。坐禅の手ほどきを受けて僅か二年の私にも歴史の重みを実感することができたからです。同時に長い人間の歴史の中に今自分が生

きている（仏教的に言えば「生かされている」）のだということも感じました。

今回の旅行に参加されました皆様方が、椎名老師は勿論のことながら、中国や仏教に対する造詣が深く、旅行中しばしば御教示を頂戴できましたことは、自分に対する大きな励みになりました。これを機会に、今後龍泉院参禅会の末席に加えていただきたいと思います。改めて椎名団長はじめ皆様方にお礼を申し上げます。

## 筍掘り

四月二五日、茶話会を早々に切



このくらいの筍が一番おいしいよ



こんな固い地面に、筍が！

り上げ、身支度をすませた会友がクワやスコップを手に、本堂裏の竹林に散っていきました。

恒例となった四月下旬の筍掘りは、毎年天候に恵まれます。今回も湿度の低い爽やかな空気が竹林を満たしていました。

筍は地表にちよこんと頭を出すのが苦みも少なく柔らかい。

筍の緑の皮先を見て、クワを入れる方向を定め、土を少し掘り下げて一気にクワを振り降ろします。パキッと乾いた音がして、赤いイボの根のついたふっくらした筍が掘り起こされる。

小一時間ほどで、筍の山が出来ました。今年も数日は会友の食卓に筍料理が上ったことでしょう。龍泉院様、有り難うございました。

# 一夜接心

六月五日・六日



今年も、恒例となっている「一夜接心」が、六月五、六日の両日天徳山龍泉院において行われました（参加者二六名）。

毎月坐禅をしている本堂で、夜坐ができますのが、この一夜接心の時だけ。鳥の声、陽の光を浴びながらの常々とは異なり、音も明かりも無い世界での坐禅は、貴重な体験です。

一泊二日の忙しいスケジュールの中で、の禅講もまた大切な時間です。今回は『正法眼蔵示庫院文』を講義頂き、昨年の「重雲堂式」に書かれている禅堂の基本に続き、今年もまた台所において食をつくる基本を学ぶことができました。何げない毎日の行為の中において、仏弟子としての心を持って行うこと、そんな思いが素直に湧いてきました。

## 一夜接心

埼玉県大井町 石田 七重

- 一夜泊まり二日で七炷坐らむと龍泉院に上山を為す
- ブツガヤより請来されし菩提樹の若葉こんもり天に聳ゆる
- 御老師の「喝」の一声凄まじく



奨励賞受賞作品「すすき野原」

夜坐打つ禅堂いよ静もる  
● 参禅の会友集ひ葉石を食む食堂に涼風わたる

● 明け七つの暁天坐禅より朝課へと接心のとき刻々移る

● 紫陽花の色つき初めし境内の小径の木陰に太極拳舞ふ

● 渴きたる禅寺の庭に待望の雨は真直ぐに降りはじめたり

● 雨後の光禅寺の裏山にふり注ぎ

若き竹林の青さきはだつ

—二〇〇四年墨の県展—

大坂昌宏さん

奨励賞受賞！

昨今、水墨画が静かなブームになつていますが、去る五月一日から一六日の期間、千葉県水墨会主催による県内最大の水墨画展が、千葉市の県立美術館で開催されました。

龍泉院参禅会の会友、大坂昌弘さんが、多くの出展作品中から、しかも初出展で、見事奨励賞を受賞されました。

この榮譽を皆様とともに称え、今後益々のご精進をご期待申し上げます。

## 沼南雑誌

参禅会記録(内は座談の司会者)  
平成一六年  
●三月二十八日 三三名  
(貝森 武夫氏)

## 龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半まで  
に來山のこと) 四月は八時半より坐禅作法指導
- 一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分  
経行 一〇分  
第二炷 坐禅三〇分
- 一、講義 木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正  
法眼蔵』の提唱を聞く。現在「諸法實相」の巻
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは  
第二日曜(本年は二月五日) 积尊成道を讃え坐  
禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする
- 一、一夜接心 六月上旬、一泊し、七炷の坐禅とご提唱を聞く

●四月二十五日 三八名

(小山 齊氏)

坐禅・禅講後、筍掘り

●五月二十三日 二九名

(三浦 輝行氏)

●六月五、六日

一夜接心 二六名

於 天徳山龍泉院

幹事 加藤 孝氏

富澤 勇氏

●六月二十七日 三三名

(小泉 雅宥氏)

●七月二十五日 三一名

(添田 昌弘氏)

●八月十六日

「龍泉院施食会」作務奉仕

法話 安田剛一老師(永泉寺)

●八月二十二日 二七名

(松井 隆氏)

●九月四―十一日

江西・湖北省仏蹟参拝の旅

団長 椎名宏雄老師

●九月二十六日 二五名  
(杉浦上太郎氏)

▼今回から『明珠』の編集のお手  
伝い要員に加えていただきました。  
編集作業は始めてなので、武田・  
今泉両先輩の傍で、見よう見真似  
で作業を覚える、新入社員のような  
心境です。

▼イチローが大記録を打ち立てた。

天才バッターのイチローでも、ヒ

ットが打てるか、緊張と不安に襲  
われる事があるそうだ。不安を払  
拭し、自在なバッティングができ  
るのも、不断の努力がもたらした  
ものである。毎日の修行が大切  
なのは、どの世界でも同じである。

▼中国旅行から帰って一ヶ月過ぎ、  
旅の記憶がやや薄らいできた時に、  
団員の紀行文や詩歌を読ませてい  
ただき、また鮮やかに旅の印象が  
蘇ってきました。(五十嵐)

▼赤土の泥道で動かなくなった車  
を皆で手押し、やっと辿り着いた  
百丈山。迎えてくれた空気も人々  
の顔も爽やか。かかった時間の分  
だけ喜びが。最終日、上海空港か  
ら市街地までの乗り物はリニアモ  
ーターカー。時速四三二キロで五  
〇キロをたった七分で到着。眼前  
の風景の感動は？やはりなかった  
時間の分だけなり!

▼暑い暑い今夏でした。早朝から  
庭の木槿が咲きはこる毎日。九月  
になり、そろそろ終わりがなと思  
いきや、残暑と共にまたまた元氣  
に。十月の声を聞くまで姿を見せ  
てくれました。(宗房)

▼今号から五十嵐氏に編集のお役  
をお願いしました。編集のセンス  
は抜群です。これから宜しくお願  
いいたします。(竹泉)